

熊本大学
永青文庫研究センター

年 報

第13号

2022

熊本大学永青文庫研究センター

はじめに

2021年度は、永青文庫研究センターが学内共同教育研究施設となって5年目を迎えた。多くの組織と同様、本センターも2年目のコロナ禍によって、あらゆる活動の面で厳しい状況に立たされることになった。

しかし、感染の波が弱まったタイミングでは、前年度から持ち越されていたいくつかの講演が実施でき、また複数のオンラインシンポジウムや講演にも取り組むなど、社会貢献の面では活動のある程度は盛り返すことができた。古文書等の調査については、熊本大学所蔵松井家文書の調査に協力いただいていた熊本県内外の学芸員や大学教員のみなさんのご参加は、施設の利用制限のために今年度も叶わなかったが、センターのスタッフによって、可能な限りの進展をみることができた。

基礎研究に取り組む過程では、松井家文書や惣庄屋古閑家文書から多くの興味深い史料が見出されており、その成果は名古屋城調査研究センターとの共催シンポジウム等にも反映された。また、熊本藩政史料の個性ある側面に光を当てた史料集『永青文庫叢書 細川家文書 意見書編』を刊行することができたし、当センター主催のシンポジウムを基にした『熊本藩からみた日本近世一比較藩研究の提起一』も上梓された。研究紀要『永青文庫研究』も第5号まで刊行を重ね、古閑家文書の調査に基づく史料紹介や研究を掲載することができた。

社会貢献活動としては、熊本大学附属図書館と共催のオンライン貴重資料展、永青文庫セミナー、名古屋城調査研究センターとのシンポジウムの共催、各種パネル展、研究成果の記者発表など、いくつかの取組みを通じて発信することができた。ご協力いただいた関係機関にお礼申し上げたい。

不透明な状況に対応しながら活動を継続するのには、いささか苦勞したが、基礎研究と社会発信という本センターの任務は着実に果たされたと考える。

2022年度には、2010年以来刊行を続けてきた『永青文庫叢書 細川家文書』の10巻目「災害史料編」が出版の運びとなる。目下、編集作業中であるが、熊本地震を経験した私たちにとって現代的意味合いの強い史料集の編纂に身の引き締まる思いである。今後ともスタッフ一同の協力のもとで、研究・社会貢献事業を発展させていく所存である。関係各位のご指導・ご鞭撻をお願いしたい。

2022年3月1日

熊本大学永青文庫研究センター長
稲葉 継陽

目 次

はじめに	1
1. 年間活動記録.....	4
2. 年間活動報告.....	10
(1) 組織運営	10
(2) 研究活動	10
(3) 展覧会・講演会・社会貢献等	14
(4) センターの運営資金	16
3. 個人年間活動.....	17
4. 記者発表要旨.....	23
(1) 「佐賀の乱」時の細川家世子をめぐる熊本での騒動を示した 新史料を発見	24
(2) アメリカでの熊本洋学校の教師人選に関する一次史料を発見	29
5. 講演要旨.....	33
(1) 稲葉継陽「戦国時代の西岡と藤孝・光秀—熊本に伝わった 古文書を中心に—」.....	34
(2) 今村直樹「廃藩置県後の旧藩主細川家と旧藩士」.....	38

1. 年間活動記録

日付	活動内容	担当・打合せ先等
2021年4月2日	氷川町岡本家調査	今村
4月8日	氷川町岡本家調査	今村
4月14日	八代市立博物館林氏来訪・打合せ	稲葉・今村・後藤
4月15～21日	蔦屋書店熊本三年坂「熊本大学永青文庫研究センタープレゼンツ『熊本城被災と修復の昔と今』」パネル展開催	
4月16日	人吉城保存活用専門会議	稲葉
4月17～18日	岡山・山口出張 岡山地方史研究会報告、山口県立文書館史料調査	今村
4月20日	氷川町岡本家調査	今村
	熊本県文化課長来訪・挨拶	稲葉
4月21日	上天草市史担当鶴嶋氏来訪・打合せ	稲葉
4月22日	高森町史編纂委員会（於熊本日日新聞社）	稲葉・今村
4月23日	静岡市による歴史資料調査に助言（於舒文堂河島書店）	稲葉
4月28日	熊本日日新聞園田記者来訪・取材	今村
4月30日	オンライン記者会見（「佐賀の乱」時の細川家世子をめぐる熊本での騒動を示した新史料を発見）	今村
	熊本大学デジタルアーカイブシンポジウムにて講演（オンライン）	稲葉
5月6～8日	栃木出張、「全国藩校サミット」打合せ	稲葉
5月8日	熊本近代史研究会報告	今村
5月10日	くまもと経済佐藤氏来訪・取材	後藤
5月11日	熊本創生推進機構高見氏・和田氏打合せ	稲葉
5月13日	大谷研究担当理事と打合せ	稲葉・人社・教育系事務課
5月14日	永青文庫学芸員と会議（オンライン）	稲葉
	附属図書館浜崎氏と概算要求の打合せ	稲葉
5月16日	BS11「偉人・素顔の履歴書」放送	
5月18日	熊本日日新聞園田記者来訪・取材	今村
5月21日	小川学長寄託史料視察	稲葉・今村・後藤
5月21日	出水神社岩永氏来訪	稲葉
5月24～28日	松井家文書目録作成調査	参加人数：7人
5月24日	『熊本藩からみた日本近世』編集会議（オンライン）	今村・神谷（横浜市）・小関（千葉大）・白石（宮内庁）・高槻（神戸大）

日付	活動内容	担当・打合せ先等
5月25～28日	インタージャム水之江氏来訪、文書撮影 (附属図書館)	
6月1日	史料所蔵者来訪	今村
6月2日	新資料学・歴史理論領域研究会(国際人文 社会科学センター)	稲葉・今村
6月4日	熊本日日新聞社魚住記者来訪・取材	稲葉
6月8日	熊本史料ネット事務局会議	稲葉・今村
6月12～13日	第50回明治維新史学会大会運営(司会・オン ライン)	今村
6月18日	第1回永青文庫研究センター運営委員会	稲葉・今村
6月20日	大名華族研究会打合せ(オンライン)	今村
6月21～25日	松井家文書目録作成調査	参加人数：7人
6月26～27日	放送大学面接授業	今村
6月30日	熊本日日新聞園田記者来訪・取材	稲葉
7月3日	「公議」研究会参加(オンライン)	今村
7月4日	放送大学熊本学習センターオンライン講演 会オンライン講演会「明智光秀の国づくり ～その政治と『本能寺の変』」	稲葉
7月7日	新資料学・歴史理論領域研究会(国際人文 社会科学センター)	稲葉・今村
7月15日	熊本県文化財保護審議会	稲葉
7月20日	名古屋城調査研究センター来訪・シンポジ ウム打合せ	稲葉・今村・後藤
	宰匠古文書修復打合せ	今村
	熊本県立美術館宮川氏来訪	今村・後藤
	熊本日日新聞園田記者来訪・取材	稲葉
7月21日	吉丸氏・永青文庫林田理事来訪、打合せ	稲葉
7月26～30日	松井家文書目録作成調査	参加人数：7人
7月31日	第7回熊本被災史料レスキューネットワー ク講演会「球磨川水害による被災文化財— 現状と課題—」(オンライン)	稲葉・今村
8月1日	県立装飾古墳館・菊文研講座講演会	今村
8月4日	永青文庫伊藤氏来訪・打合せ	稲葉・今村・後藤
	新資料学・歴史理論領域研究会	稲葉・今村
8月5日	東京大学史料編纂所林氏と打合せ(オンラ イン)	稲葉・今村
	水前寺まつり講演会打合せ	稲葉・岩水(出水神社)
8月6日	甲佐町教育委員会上高原氏来訪、講演会打 合せ	稲葉

日付	活動内容	担当・打合せ先等
8月13日	菊池市教育委員会西住氏来訪・菊池氏関係調査打合せ	稲葉
8月17～20日	松井家文書目録作成調査	参加人数：7人
8月19日	山都町教育委員会大津山氏来訪	今村
8月25日	小関科研研究会報告（オンライン）	今村・小関（千葉大）・天野（歴博）・白石（宮内）・高槻（神戸大）・宮間（中央大）
8月26日	さわやか大学校熊本校講演	今村
9月14日	鶴嶋俊彦氏来訪・打合せ	稲葉
9月15日	URA 和田氏来訪・打合せ	稲葉
9月20日	鶴之湯旅館調査（於八代市）	今村・三澤
9月21～24日	松井家文書目録作成調査	参加人数：7人
9月24日	科研費研究会（オンライン）	稲葉・今村・三澤・久留島（歴博）・木越（石川県）・酒井（聖心）・胡（愛媛大）・定兼（岡山県）・矢野（島根県）
9月26日	熊本日日新聞魚住記者来訪・取材	稲葉
9月27日	文化財保護協会高木氏来訪・打合せ	稲葉
	熊日サービス今坂氏来訪・打合せ	稲葉
9月30日	熊本県文化課中山氏来訪・打合せ	稲葉
9月30日	熊本県立美術館有木氏来訪・打合せ	稲葉
10月1～2日	大分出張、大分県立先哲史料館で古文書調査	稲葉・後藤
10月3日	大名華族研究会参加（オンライン）	今村
10月5日	NHK 特番坂本ディレクター来訪・取材打合せ	稲葉・後藤・林田（永青文庫）
10月6日	新資料学・歴史理論領域研究会（国際人文社会科学センター）	稲葉・今村
10月7日	藤木史学論集オンライン編集会議	稲葉・清水（明治大）
	熊本県立美術館有木氏来訪・打合せ	稲葉
10月10日	菊池一族調査研究事業発表会（於菊池市）	稲葉
10月13日	テレビタミ取材	稲葉
10月15日	藤木史学論集オンライン編集会議	稲葉・清水（明治大）
10月16日	日本家政学会九州支部講演	稲葉
10月19日	出水神社岩永氏来訪	稲葉
	テレビタミ放送（KKT）	
10月21日	熊本県立図書館深瀬氏来訪	今村
10月24日	阿蘇南郷史談会講演（於長野公民館）	今村
10月25～29日	松井家文書目録作成調査	参加人数：7人

日付	活動内容	担当・打合せ先等
10月26日	熊本日日新聞社魚住記者来訪・取材	今村
	熊本県立図書館佐藤館長来訪・挨拶	稲葉
	永青文庫セミナー動画撮影	今村
	オンライン記者発表（アメリカでの熊本洋学校の教師人選に関する一次史料を発見）	今村
	令和3年熊本大学附属図書館オンライン貴重資料展 「廃藩置県と熊本藩」	
10月27日	公開講演会第15回永青文庫セミナー (いずれも附属図書館ホームページにて公開)	今村・三澤
10月28日	高森町役場史料調査	今村
11月1日	天草市棚底城整備検討委員会	稲葉
11月5～6日	多良木相良氏関連遺跡群調査指導委員会	稲葉
11月7日	京都出張、吉田光由350遠忌出席（於、二尊院）	稲葉・後藤
11月9日	熊本県文化協会吉丸名誉会長来訪・打合せ	稲葉
11月10日	八代市立博物館林氏来訪・展覧会打合せ	稲葉・今村・後藤
11月11～13日	高知出張、四万十市郷土博物館・オーテピア高知図書館史料調査	今村
11月13日	陣ノ内城跡国史跡記念シンポジウムにて講演（於、甲佐町生涯学習センター）	稲葉
11月14日	京都出張、長岡京ガラシャ祭りにて講演（於、長岡京記念文化会館）	稲葉
11月16日	さわやか大学小西氏来訪	今村
11月17～19日	東京大学史料編纂所山口氏・林氏来訪、史料調査	
11月20日	第51回明治維新史学会大会（司会・オンライン）	今村
11月20～21日	栃木出張、第18回全国藩校サミット壬生大会記念講演（於、壬生中央公民館城址公園ホール）	稲葉
11月23日	熊本学習センター開設30周年記念講演	稲葉
11月24～26日	松井家文書目録作成調査	参加人数：7人
11月27日	水前寺成趣園350年シンポジウム コーディネーター	稲葉
11月28日	阿蘇南郷史談会講演（於長野公民館）	今村
11月30日	熊本さわやか大学校八代校講演	今村
12月1日	永青文庫常設展示基金運営委員会	稲葉

日付	活動内容	担当・打合せ先等
12月2日	新資科学・歴史理論領域研究会（国際人文社会科学センター）	稲葉・今村
12月3日	宰匠藤井氏来訪、修復古文書納品	今村
	熊本県立図書館深瀬氏打合せ	今村
	壬生町中学校オンライン講演会にて講演	稲葉
12月4日	熊本史学会秋季研究発表大会報告	今村
12月6日	熊本県文化振興審議会（事前説明）	稲葉・県文化企画課
12月8日	藤木史学論集オンライン編集会議	稲葉・清水（明治大）
12月9～10日	名古屋出張、シンポジウム開催・講演収録	稲葉・今村・後藤・名古屋城調査研究センター
12月12日	阿蘇南郷史談会講演（於長野公民館）	今村
12月14～15日	竹田市納池公園名勝地調査委員会	今村
12月16日	熊本県文化振興審議会	稲葉
12月17日	文化財保存修復学会日高氏来訪・打合せ	稲葉・今村
	熊本日日新聞園田記者来訪・取材	今村
12月20日	RKB取材（オンライン）	後藤・西條（さくら組）
12月24日	科研研究会（オンライン）	稲葉・今村・三澤・久留島（歴博）・木越（石川県）・酒井（聖心）・胡（愛媛大）・定兼（岡山県）・矢野（島根県）
2022年1月7日	東京出張、永青文庫訪問・細川理事長に挨拶	稲葉・小川学長・林田（永青文庫）
1月8日	大名華族研究会打合せ（オンライン）	今村
1月13日	菊池一族調査研究事業発表会（於菊池市）	稲葉
1月18日	文化財保存修復学会打合せ（オンライン）	稲葉・今村
1月19日	コロニー印刷室原氏来訪	今村
1月20日	出水神社岩水氏来訪・打合せ	稲葉
1月22日	新修豊田市史編纂委員会（オンライン）	今村
1月24～28日	松井家文書目録作成調査	参加人数：7人
2月2日	シモダ印刷沖氏来訪	今村
	コロニー印刷室原氏来訪	今村
2月14日	永青文庫叢書意見書編納品	
	コロニー印刷室原氏来訪	今村
2月14～18日	松井家文書目録作成調査	参加人数：7人
2月18日	コロニー印刷室原氏来訪	今村
2月21日	熊本日日新聞園田記者来訪・取材	稲葉
2月22～3月7日	パレアロビー展「1620年代 細川家の葡萄酒製造とその背景」開催（於くまもと県民交流館パレア）	

日付	活動内容	担当・打合せ先等
2月25日	インタージャム水之江氏来訪・取材	
2月25～27日	福井・金沢出張、シンポジウム「大名華族家と地域社会」報告（於金沢大学サテライトプラザ）、前田土佐守家資料館史料調査	今村
3月1日	コロニー印刷室原氏来訪	今村
	熊本県立図書館深瀬氏来訪	今村
	小関科研研究会参加（オンライン）	今村・小関（千葉大）・天野（歴博）・白石（宮内）・高槻（神戸大）・宮間（中央大）
	出水神社岩水氏来訪・打合せ	稲葉
3月2日	熊本県保険医協会主催講演会にて講演	稲葉
3月8日	肥後六花シンポジウムにて講演	稲葉
3月11日	熊本日日新聞鬼束記者来訪・取材	稲葉・今村
3月13日	菊池氏関連史跡調査成果報告会にて講演	稲葉
3月16日	熊本日日新聞鬼束記者来訪・取材	稲葉
	読売新聞若林・井上記者来訪・取材	今村
3月17日	菊池氏関連史跡調査検討委員会	稲葉
	くまもと文学・歴史館特別展「湧水と生きる 江津湖の歴史と文学」（～5月23日）	
3月20～21日	東京出張・永青文庫にて打合せ及び講演会への参加	稲葉・後藤
3月23日	小国町教育委員会所蔵古文書調査	今村
3月24日	高森町史編纂委員会（於熊本日日新聞社）	稲葉・今村
3月26～27日	新修豊田市史編纂委員会	今村
3月28日	日印朝科研研究会（オンライン）	稲葉・今村
	文化庁調査官永青文庫資料視察	稲葉・後藤
3月30日	科研費研究会（オンライン）	稲葉・今村・三澤・久留島（歴博）・木越（石川県）・酒井（聖心）・胡（愛媛大）・定兼（岡山県）・矢野（島根県）

2. 年間活動報告

(1) 組織運営

本年度の運営は、主として専任教員の稲葉継陽教授、今村直樹教授が担い、兼務教員として三澤純准教授、安高啓明准教授がこれに協力した。また後藤典子特別研究員が基礎研究分野での古文書解読等を担うとともに、科学研究費補助金基盤研究（B）（研究代表者・今村）によって雇用されている社会文化科学研究科及び文学部の学生も、史料のデータ化等の実務にたずさわった。

永青文庫研究センター運営委員会を通じての運営は、おおむね円滑に進められた。

なお、2021年12月1日に熊本県庁で開催された永青文庫常設展示振興基金運営委員会にて2021年度の事業計画と中間報告を行い、承認された。

(2) 研究活動

1) 永青文庫細川家文書の画像データ蓄積と分析

本年度も例年と同様、永青文庫細川家文書の藩政史料について、新たなデータの蓄積を行った。

撮影を実施したのは、近世前期における奉行所の合議記録群「奉行所日帳」、幕末期に編纂された藩主・家老宛の意見書集成である「上書」などである。

撮影された画像データは、『永青文庫叢書 細川家文書』の出版や熊本大学附属図書館貴重資料展などに活用されるとともに、基礎研究の一層の推進のための基礎データとして分析が深められる予定である。

2) 惣庄屋史料古閑家文書の目録作成・クリーニング・画像蓄積作業と共同研究

古閑家文書（古閑孝氏所有）は、総点数が20,000万点をこえる熊本藩惣庄屋史料の代表的存在である。2016年4月熊本地震の被災後、熊本被災史料レスキューネットワークにより所有者のもとから熊本大学に移管され、将来的な寄贈・寄託を前提に、現在は文学部の教員研究室で保管されている。2019年度からは、古閑家文書を主たる分析対象とする研究課題「『熊本藩関係貴重資料群』の総合的解析による日本近世の意思決定構造の実証的研究」（研究代表者・今村直樹）が、科学研究費補助金基盤研究（B）に採択された。本センターは当該年度から、①古閑家文書の目録作成、②大庄屋（惣庄屋）・組合村などの近世地域行政機構に関する全国的な比較共同研究を進めている。

①では、今村と科研費で雇用された大学院社会文化科学教育部及び文学部の学生が、古閑家文書の目録作成と未整理分のクリーニング作業に従事し、1,949点の目録を作成するとともに、中性紙保存箱15箱分のクリーニングを終えることができた。本年度の調査では、増水した河川水位を報告した村庄屋の報告書や、嘉永6年（1853）の阿蘇郡布田手永における新井手設置に関する議定書の写など、貴重な史料を発見できた。こうした新知見の一部は、本年度の研究報

告や学術論文に反映されており、来年度刊行予定の『永青文庫叢書 細川家文書 災害史料編』にも関連史料が収録される予定である。目録調書のデータ化作業も進め、本年度は1,490点の調書データの入力を完了した。また、本年度からは新たに、古閑家の歴代当主が作成した日記の画像データ蓄積作業を開始した。

②では、東京・千葉・石川・岡山・島根・愛媛各県の研究者とともに、近世の地域行政機構に関する研究会を(1)9月24日、(2)12月24日、(3)3月30日の3回、いずれもオンラインで開催した。報告題目は以下の通りである。

(1) 2021年9月24日

久留島浩（国立歴史民俗博物館）

わたしはなぜ組合村一惣代庄屋にこだわったのか？

—今村科研に参加させていただこうと思った理由を含めて—

酒井一輔（聖心女子大学）

寛政改革期の奇特者褒賞と村財政

(2) 12月24日

今村直樹（熊本大学）

近世後期熊本藩領の河川・用水管理と地域社会—白川・馬場楠井手を事例に—

矢野健太郎（島根県）

明治初期山口県における「民費」成立をめぐる

(3) 2022年3月30日

胡光（愛媛大学）

幕末維新期の村財政と村役をめぐる諸問題—伊予西条藩領中野村を中心に—

一定兼学（岡山県立記録資料館）

岡山藩の大庄屋と地域社会

科研の最終年度にあたる2022年度は、共同研究の成果を総括するシンポジウムを熊本で開催する予定である。

3) 熊本大学所蔵松井家文書の目録作成・修復・クリーニング作業

熊本大学附属図書館には、熊本藩の第一家老であった松井家に伝来した古文書・古記録（松井家文書）約36,000点が保管されている。本センターは2018年度から、①松井家文書の目録作成、②修復作業に着手している。

①の目録作成では、新型コロナウイルス感染症の影響のため、昨年度に引き続き、作業従事者はセンタースタッフのみに限られた。附属図書館で実施した一週間単位の集中調査は9回であった（総日数41日、延べ人数63人）。こうした厳しい状況下であったが、1,682点の目録を作成し、近世前期の細川光尚および近世中期の「島原大変肥後迷惑」の関連史料を新たに発見することができた。これらの史料は、来年度の熊本大学附属図書館貴重資料展や『永青文庫叢書 細川家文書 災害史料編』などで紹介される予定である。

②の修復作業では、附属図書館から申請された「熊本大学所蔵『熊本藩関係貴重資料群』の修復事業」が第3回三菱財団文化財保存修復事業助成対象に選ばれ、学術的価値が高い松井家

文書のうち、保存状態が悪いもの9点の修復を専門業者に依頼することができた。来年度半ばには修復が完了する予定である。

また、本年度は9月から10月にかけて、科学研究費補助金（代表・今村直樹）や附属図書館が雇用した学部生（学内ワークスタディ）が中心となり、未整理分の松井家文書のクリーニング作業を行った。この結果、松井家文書の大部分のクリーニングを完了することができた。

4) 『永青文庫叢書 細川家文書 意見書編』の発刊

永青文庫叢書は、永青文庫細川家資料などからとくに学術的価値が高い古文書・絵図類を図版入りで紹介するもので、永青文庫研究センターによる研究活動の基軸である。本センターは2019年から第2期（全5冊）の刊行を進めており、本書はその4冊目にあたる。

江戸時代をめぐっては、武力を独占した武士が、百姓の政治に対する発言を禁じるとともに、その武士自身も主君である将軍や大名に服従を強いられたというイメージが根強くある。しかし、細川家文書・松井家文書から本書に収録された全55点の史料は、そうしたイメージに大きな見なおしを迫る。収録史料からは、不当な年貢負担を課せられた際、武士の統治を堂々と批判した百姓の姿や、代替りや財政難などの非常時に、藩主や家老に対して活発に意見した細川家家臣の姿を見てとることができる。主君に統治者として相応しい人格を求め続けた近世前期の細川家家老松井興長の意見書や、興長の精神を継承して幕末期に編纂された意見書集成である細川家文書「上書」は、それを象徴する存在である。「上書」には、近世中後期の意見書等446通が収録されているが、本書には、そこから注目すべき35通の意見書を選抜し、収録している。

また、解説編には以下の論考を収録するとともに、序文は公益財団法人永青文庫細川護熙理事長に寄稿いただいた。

稲葉継陽「細川家・松井家の近世前期意見書群」

今村直樹「細川家文書『上書』と近世中後期の熊本藩政」

小関悠一郎「熊本藩宝暦改革と近世後期の政治理念」

高槻泰郎「勝手向（財政）に関する意見書について」

なお、来年度刊行予定の災害史料編により、永青文庫叢書シリーズは完結予定である。

5) 今村直樹・小関悠一郎編『熊本藩からみた日本近世—比較藩研究の提起—』（吉川弘文館、2021年8月）の刊行

2000年代以降の日本近世史研究では、岡山藩・尾張藩・松代藩・津藩・加賀藩・鳥取藩など特定の藩を対象とした共同研究がさかんである。これは、特定の藩を単位として、分野別に分断されてきた諸問題を総合的に把握することを目的としているが、その目的はいまだ十分に達成されていない。また、現状では藩研究相互の対話も不十分であり、それぞれの藩研究を全体として総合する視点は提示されていない。

こうした研究状況を鑑み、本センターと40代の日本近世史研究者からなる「熊本藩研究会」は、江戸幕府や他藩の研究者を招き、2019年3月にシンポジウム「熊本藩からみた日本近世—比較藩研究の提起—」を熊本大学で開催した。「比較藩研究」の目的は、熊本藩を比較軸に据

えて共同研究を行い、そこで得られた知見と論点を総合的に提示することで、個別分散化が進み、論争自体が少なくなった日本近世社会論の活性化を目指すことにあった。本書は、そのシンポジウムの研究報告をもとに編まれたものである。目次は以下の通り。

序 章 比較藩研究の提起—熊本藩共同研究からの発信…今村直樹・小関悠一郎

第Ⅰ部 知行制と地域社会

第1章 初期大名領国における知行制と村請制…稲葉継陽

第2章 近世中後期藩領国の地方行政と荒廃農村対策…今村直樹

特論1 近世知行制改革の比較論…木越隆三

第Ⅱ部 近世中期の経済・思想

第1章 大坂金融商人の成長と領国経済…高槻泰郎

第2章 近世中後期における藩政理念の展開と変容…小関悠一郎

特論2 中後期の藩政と上方銀主…金森正也

特論3 熊本藩徒刑と佐賀藩徒罪の比較検討…安高啓明

第Ⅲ部 幕末期の政治と軍事

第1章 幕末期熊本藩にみる相州警衛の展開と村々取締役頭取永嶋家…神谷大介

第2章 肥後藩京都留守居の役割変遷…白石 烈

特論4 比較史の射程…高木不二

終 章 比較藩研究の深化に向けて…小関悠一郎・今村直樹

本書の刊行は、他地域の研究者からも関心を呼んでおり、来年度、いくつかの地域で書評会が計画されている。本センターでは、引き続き国内外の研究者と連携しながら、日本近世史の研究拠点としての発信を強化していきたい。

6) 紀要『永青文庫研究』第5号の刊行

本センターは、2017年度から研究紀要『永青文庫研究』を刊行している。本年度の第5号には、永青文庫研究センタースタッフ及び学外の研究者からの寄稿により、論文2本、史料紹介1本、書評1本を収録することができた。

第5号の目次は以下の通りである。

論 文

近世初期における諸国城割と地域社会

—藩政成立史序説— …………… 稲葉 継陽

近世後期藩領国の河川分水問題と流域社会

—熊本藩領の白川を事例に— …………… 今村 直樹

史料紹介

近世後期における肥後・三池の漁場用益争論（一） …………… 川端 駆

書 評

熊本大学永青文庫研究センター編『永青文庫叢書 細川家文書 意見書編』

…………… 久留島 浩

(3) 展覧会・講演会・社会貢献等

1) 第36回 熊本大学附属図書館オンライン貴重資料展「廃藩置県と熊本藩」(2021年10月公開、附属図書館と共催)

2) 第15回 永青文庫セミナー 三澤純「熊本城廃棄申請書の成立事情と『御城拝見』」、今村直樹「廃藩置県後の旧藩主細川家と旧藩士」(2021年11月公開、附属図書館と共催)

2021年は、明治4年(1871)の廃藩置県から150年目にあたる。2021年度の熊本大学附属図書館貴重資料展は、本センターとの共催による「廃藩置県と熊本藩」をテーマとして、三澤純兼務教員と今村直樹専任教員の展示監修のもと、二年ぶりの対面式開催をめざして準備を進めていた。しかし、本年度もコロナ禍の影響のため、昨年度に続き、附属図書館特設サイトによる「オンライン貴重資料展」の開催となった。対面式ならば、30点の資料展示を行う予定であったが、オンラインのため、画像を公開する資料を6点に絞らざるをえなかった。

しかし、本年度は第36回の貴重資料展として、二年ぶりに解説目録を作成するとともに、同じく公開講演会である第15回永青文庫セミナーを開催することができた。永青文庫セミナーは、初めてYouTubeを通じた公開となった。明治初年、先進的な藩政改革を行っていた熊本藩の改革はどのような実績をあげたのか。廃藩置県後、旧藩の存在はその後の熊本にどのような影響を及ぼしたのか。また、旧藩主細川家や旧藩士の動向はいかなるものだったか。細川家文書および本センター所蔵の旧熊本藩士幸家文書から、現代日本の起点と位置付けられる巨大な転換期の一端を復元できた。

コロナ禍にあって、昨年度に続く「オンライン貴重資料展」は、歴史資料研究の成果をひろく社会に発信する有意義な取り組みであったといえる。開催・運営に尽力いただいた熊本大学附属図書館の関係者の方々に感謝したい。

なお、本特設サイトの閲覧者数は、2022年2月末時点で1,440件に達している。

3) 展覧会「開館記念特別展 名古屋城誕生！」への協力

(2021年11月1日～12月19日、名古屋西の丸御蔵城宝館、名古屋城調査研究センター主催)

4) YouTube名古屋城調査研究報告会(シンポジウム)「史料が語る 名古屋城石垣普請の現場」の共催

(2021年12月9日収録、2022年2月1日YouTube公開、名古屋城調査研究センターと共催)

慶長5年(1600)の関ヶ原の戦い以後、徳川家康は諸大名を動員して、伏見城、彦根城、駿府城、丹波篠山城、そして名古屋城といった大規模な城郭普請をつぎつぎと推進した。これらの築城普請は研究史上「公儀普請」「天下普請」などと呼ばれ、豊臣家に対する備えであるとともに、家康の威光を天下に示すものでもあったと評価されている。

とりわけ慶長15年(1610)に行われた名古屋城の石垣普請は大規模なもので、そこには前田利常、加藤清正、池田輝政、細川忠興など、西国・北国から20もの大名が動員され、長大な石垣を短期間のうちに築き上げた。その関係史料は、肥後細川家や松井家にも伝来している。本センターの研究をもとに、3)の展覧会に松井家文書の貴重資料2点が熊本大学から出品され、4)の研究報告(シンポジウム)には、本センターから後藤典子が研究報告で、稲葉継陽がコ

メンテーターとして参加した。

わけても4)では、大名の動員実態、多くの大名が集まる普請現場の実態、労働力や石材の調達、費用の調達と負担など、多くの問題が議論され、「公儀普請」「天下普請」研究の深化への足がかりが得られた。

5) 熊本大学永青文庫研究センタープレゼンツ 熊本大学×ニューコ・ワン共同企画パネル展「熊本城被災と修復の昔と今」の開催（会場：蔦屋書店熊本三年坂）

6) パレアロビー展「1620年代 細川家の葡萄酒製造とその背景」開催（会場：くまもと県民交流館パレア）

ともに熊本大学広報戦略室の肝いりによって開催した市民向けイベントである。

5)は蔦屋書店の運営会社である(株)ニューコ・ワンとの共同企画で、蔦屋書店熊本三年坂の地下スペースにて、当センターの研究成果のパネル展示とともに、関連書籍等の展示販売を行った。

6)は、くまもと県民交流館パレア10Fのロビーにて、細川家による近世初期の葡萄酒製造を示す歴史資料等のパネル展示を実施したものである。

今後とも市民生活に密着した発信方法を工夫していきたい。

7) くまもと文学・歴史館 特別展「湧水と生きる 江津湖の歴史と文学」(2022年3月17日～5月23日)への協力

熊本市郊外にある江津湖は、阿蘇や白川中流域からの伏流水が湧き出る「地下水都市・熊本」のシンボルである。豊かな湧水は古くから地域の生活を支え、多くの人びとを魅了し続けてきた。

本展は、第38回全国都市緑化くまもとフェアの開催にあわせて、江戸時代から現代までの約400年にわたり、江津湖の湧水とともに生きた人びとの歴史と生み出された文学を紹介するものである。本展には、江戸時代の江津湖に関係する永青文庫細川家文書とともに、古閑孝氏が所有し、現在本センターが保管する惣庄屋史料古閑家文書も出品されている。本センターも、古閑家文書に関するこれまでの研究成果をもとに協力した。

8) 熊本大学広報戦略室を通じた研究成果の記者発表

2019年度末から続くコロナ禍のために、本年度も少なくない講演会が中止となった。そのため、最新の研究成果を発信する手段として、昨年度に引き続き本年度も、熊本大学広報戦略室を通じたマスコミへの公式発表と熊本大学HPへの掲載、zoomを活用した記者会見を実施した。本年度は、以下の2件を発表することができた。

①と②の発表内容は本年報の巻末に収録しているが、いずれも新聞で報道され、反響を呼んだ。松井家文書や本センター所蔵史料の地道な基礎研究によって得られた新発見、新知見を社会一般に周知する上で有効な手段であり、来年度以降も取り組みを続けていきたい。

① 「『佐賀の乱』時の細川家世子をめぐる熊本での騒動を示した新史料を発見」(2021年4月22日)

② 「アメリカでの熊本洋学校の教師人選に関する一次史料を発見」(2021年10月19日)

(4) センターの運営資金

本年度の永青文庫研究センターの運営資金は、主に以下の事業費等によった。

- 1) 文部科学省 機能強化経費 (プロジェクト分)
- 2) 日本学術振興会 科学研究費補助金基盤研究 (B)
- 3) 熊本大学 みらい研究推進事業
- 4) 熊本大学 学長裁量経費

3. 個人年間活動

稲葉継陽

各種委員会

人吉城跡調査検討委員、佐敷城跡調査検討委員（芦北町）、宇土城跡調査検討委員、菊之城史跡調査検討委員（菊池市）、棚底城跡整備検討委員（天草市）、上天草市史編纂委員、高森町史編纂委員、公益財団法人肥後の水とみどりの愛護基金理事、永青文庫常設展示振興基金運営委員（熊本県教育庁文化課）、熊本県文化財保護審議委員、熊本県文化振興審議会委員、放送大学熊本学習センター客員教授

論文等

- ・「明智領国の形成と歴史的的位置」（藤田達生編『織田政権と本能寺の変』塙書房、2021年4月、221-265頁）
- ・「初期大名領国における知行制と村請制—寛永十三年熊本藩郡方改革をめぐって—」（今村直樹・小関悠一郎編『熊本藩からみた日本近世』吉川弘文館、2021年9月、16-49頁）
- ・「近世初期領国境目地域における庄屋と百姓鉄炮」（蔵持重裕編『日本中世社会と村住人』勉誠出版、2021年9月、299-333頁）
- ・「鳥居元忠の活躍と壬生」（第18回全国藩校サミット壬生大会実行委員会・一般社団法人漢字文化振興協会編『第18回全国藩校サミット壬生大会 鳥居家三君に見る人づくりの精神』2021年11月、16-22頁）
- ・「解説 漂流者と内なる近代」（岩岡中正『幕末の漂流者・庄蔵 二つの故郷』弦書房、2022年1月、108-115頁）
- ・「細川家・松井家の近世前期意見書群」（熊本大学永青文庫研究センター編『永青文庫叢書 細川家文書 地域行政編』吉川弘文館、2022年3月、361-368頁）
- ・「近世初期における諸国城割と地域社会—藩政成立史序説—」（『永青文庫研究』5、2022年3月、1-25頁）
- ・「戦国天草最大の激戦地・棚底城—上津浦・栖本・相良氏と棚底城—」（天草市観光文化部文化課『史跡棚底城国指定10周年記念誌』2022年3月刊行予定）
- ・「地域史のなかの陣ノ内城」（甲佐町教育委員会『陣ノ内城跡』国史跡記念シンポジウム』2022年3月刊行予定）
- ・「コメント」（『名古屋城調査研究報告 史料が語る 名古屋城石垣普請の現場』名古屋城調査研究センター、2022年3月刊行予定）

研究発表

- ・「日本近世社会形成史の研究」、国際人文社会科学センター新資料学歴史理論領域研究会、2021年6月2日
- ・「1615年における諸国城割と藩政の成立」、日印朝科研研究会、2022年3月28日、オンライン開催

雑誌連載

- ・「永青文庫 歴史万華鏡」（73）～（84）（『阿蘇』1068～1079号、2021年4月～2022年3月）

- ・「細川家文書の世界」第22～25回（『季刊永青文庫』No.113～116、2021年4月・7月・10月、2022年2月）

新聞寄稿

- ・書評「林千寿著『家老の忠義 大名細川家存続の秘訣』（『熊本日日新聞』2021年5月9日朝刊）
- ・「熊本城を歩く インタビュー編4 観光活用から保護に力点を」（『熊本日日新聞』2021年11月16日）

講演等

- ・「災害史料と現在、そして未来」、熊本大学デジタルアーカイブシンポジウム 災害の教訓を次世代につなげるために（熊本大学）、2021年4月30日
- ・「熊本地震と熊本城の復興」、日本家政学会九州支部第66回大会（遠隔講演）、2021年10月16日
- ・「地域史のなかの陣ノ内城跡」、「陣ノ内城跡」国史跡記念シンポジウム 記念講演（甲佐町教育委員会、甲佐町生涯学習センター）、2021年11月13日
- ・「戦国時代の西岡と藤孝・光秀—熊本に伝わった古文書を中心に—」長岡京ガラシャ祭歴史講演会（京都府長岡京記念文化会館）、2021年11月14日
- ・「鳥居元忠の活躍と壬生」第18回全国藩校サミット壬生大会 記念講演（栃木県・壬生中央公民館）、2021年11月20日
- ・「織田信長文書の宝庫・熊本—その背景と現代的意味—」放送大学熊本学習センター開設30周年 記念講演会、2021年11月23日
- ・「天下泰平を支えた先人たち—その言葉に学ぶ—」、夢と志のある人づくり講演会（栃木県・壬生町教育委員会、中学校の教室と繋いだ遠隔講演）、2021年12月3日
- ・「永青文庫から見る肥後細川家と熊本—忠興・忠利の健康管理と疫病対応—」第28回熊本健康会議 市民公開講演会（一般社団法人熊本県保険医協会）、2022年3月2日
- ・「細川重賢と肥後六花」、肥後六花シンポジウム（水前寺成趣園350年記念実行委員会）、2022年3月8日
- ・「中世菊池氏の歴史的な位置」、令和3年度菊之城跡周辺の確認調査成果報告講演会（菊池市教育委員会）、2022年3月13日
- ・名古屋城調査研究報告「史料が語る 名古屋城石垣普請の現場」（名古屋城調査研究センター・永青文庫研究センター）、コメンテーター、2021年12月9日収録、2022年2月1日YouTube公開
- ・「水前寺成趣園350年シンポジウム 肥後細川家の魅力に迫る」（水前寺成趣園350年記念実行委員会）、コーディネーター、2021年11月27日

今村直樹

各種委員会

宇土市高月邸保存活用検討会委員、宇土市歴史的資料保存活用事業運営委員会委員、高森町史編纂委員、竹田市納池公園名勝地調査委員、新修豊田市史編さん委員会執筆協力員、伊豆

の国市史跡等整備調査委員会委員

著書

- ・『熊本藩からみた日本近世—比較藩研究の提起—』（吉川弘文館、2021年9月、小関悠一郎と共編著、全326頁）

論文等

- ・「文明社会の進展と人々の動き」（新修豊田市史編さん委員会編『新修豊田市史4 通史編 近代』豊田市、2021年6月、pp.74-81）
- ・「郡制・町村制下の行政」（同上『新修豊田市史4 通史編 近代』、pp.194-197）
- ・「書評 奈良勝司著『明治維新をとらえ直す—非「国民」的アプローチから再考する変革の姿—』（『明治維新史研究』19、2021年4月、pp.60-68）
- ・「書評 木越隆三著『加賀藩改作法の地域的展開—地域多様性と藩アイデンティティー—』（『加賀藩研究』11、2021年7月、pp.46-51）
- ・「比較藩研究の提起—熊本藩共同研究からの発信—」（小関悠一郎と共著。今村直樹・小関悠一郎編『熊本藩からみた日本近世—比較藩研究の提起—』吉川弘文館、2021年9月、pp.1-13）
- ・「近世中後期藩領国の地方行政と荒廃農村対策—熊本藩と尾張藩の比較—」（同上、pp.50-85）
- ・「比較藩研究の深刻化に向けて—熊本藩にみる〈藩システム〉—」（小関悠一郎と共著。同上、pp.297-312）
- ・『廃藩置県と熊本藩』（第36回熊本大学附属図書館貴重資料展解説目録、三澤純と共編著、2021年10月、全10頁）
- ・「永青文庫資料と近代—廃藩置県と旧熊本藩士—」（『熊本近代史研究会会報』600、2021年12月、pp.24-25）
- ・「『近世の地域行財政と明治維新』の意図と課題」（『岡山地方史研究』155、2021年12月、pp.21-28）
- ・「細川家文書『上書』と近世中後期の熊本藩政」（熊本大学永青文庫研究センター編『永青文庫叢書 細川家文書 意見書編』吉川弘文館、2022年2月、pp.369-382）
- ・「熊本被災史料レスキューネットワーク」（天野真志・後藤真編『地域歴史文化継承ガイドブック 付・全国資料ネット総覧』文学通信、2022年3月、pp.225-228）
- ・「石切場をめぐる大名家と村—伊豆半島の場合—」（『名古屋城調査研究報告3 史料が語る名古屋城石垣普請の現場』名古屋城調査研究センター、2022年3月、pp.100-101）
- ・「近世後期藩領国の河川分水問題と流域社会—熊本藩領の白川を事例に—」（『永青文庫研究』5、2022年3月、pp.25-43）

研究発表

- ・「拙著『近世の地域行財政と明治維新』書評へのリプライ」岡山地方史研究会4月例会、2021年4月17日、岡山県生涯学習センター（岡山市北区）
- ・「旧熊本藩主細川家と佐賀の乱」熊本近代史研究会5月例会、2021年5月8日、市民会館シアーズホーム夢ホール（熊本市中央区）

- ・「天保期熊本藩の政治抗争と上書」「富国論」科研＋『永青文庫叢書』研究会、2021年8月25日、オンライン開催
- ・「明治維新を地域社会史からとらえ直す」国際人文社会科学センター新資料学歴史理論領域研究会、2021年10月6日、熊本大学
- ・「天保期熊本藩の政治抗争と『上書』」熊本史学会秋季研究発表大会、2021年12月4日、熊本市男女共同参画センター（熊本市中央区）
- ・「近世後期熊本藩領の河川・用水管理と地域社会—白川・馬場楠井手を事例に一」科研費研究会、2021年12月24日、オンライン開催
- ・「旧藩の資産と事業のゆくえ—藩研究と大名華族研究をつなぐために—」シンポジウム「大名華族家と地域社会」、2022年2月26日、金沢大学サテライトプラザ（金沢市）
- ・「近世後期熊本藩の河川灌漑問題と流域社会」日印朝科研研究会、2022年3月28日、オンライン開催

講演等

- ・「熊本藩の治水・利水事業と手永・惣庄屋制—白川水系を中心に—」装飾古墳館・菊文研講座、2021年8月1日、熊本県立装飾古墳館（山鹿市）
- ・「熊本城と細川家の明治維新」熊本さわやか大学校、2021年8月26日、熊本県総合福祉センター（熊本市中央区）
- ・「熊本藩の手永・惣庄屋制と地域社会—阿蘇南郷を中心に—」阿蘇南郷史談会、2021年10月24日、長野公民館（阿蘇郡南阿蘇村）
- ・「阿蘇一揆と郷備金—明治維新が阿蘇にもたらしたもの—」阿蘇南郷史談会、2021年11月28日、長野公民館（阿蘇郡南阿蘇村）
- ・「廃藩置県後の旧藩主細川家と旧藩士」第15回永青文庫セミナー、2021年11月26日、YouTube 配信
- ・「熊本城と細川家の明治維新」熊本さわやか大学校、2021年11月30日、桜十字ホールやつしろ（八代市）
- ・「旧熊本藩主細川家と士族反乱—阿蘇南郷との接点—」阿蘇南郷史談会、2021年12月12日、長野公民館（阿蘇郡南阿蘇村）
- ・「古文書を読む」熊日生涯学習プラザカルチャー講座、2021年度毎月第1・第3月曜日、びぶれす熊日会館（熊本市中央区）

後藤典子

論文

- ・「細川忠興・忠利父子の名古屋城石垣普請」（『名古屋城調査研究報告 史料が語る 名古屋城石垣普請の現場』2022年3月刊行予定）

エッセイ

- ・「1620年代 小倉藩細川ワイン製造とそのゆくえ」（『月刊経団連』2021年4月号、58-59頁）

講演

- ・「細川忠興・忠利父子の名古屋城石垣普請」、名古屋城調査研究報告「史料が語る 名古屋城

石垣普請の現場」、2021年12月9日収録、2022年2月1日 YouTube 公開

協力

- ・九十九止「現代に蘇る細川三斎（忠興）公が愛したお菓子「薏苡仁糖」について」（『郷土史夜豆志呂』八代史談会、2022年2月）への史料提供等

日高愛子

著書

- ・『飛鳥井家歌学の形成と展開』（勉誠出版、2022年2月、全528頁）

論文等

- ・「「運ぶ」伊勢と「書く」伊勢—一版本『伊勢物語』にみる伊勢図像—」（『語文研究』第130・131合併号、2021年6月）
- ・「久我美子自筆『桂能里の紀行』解題と翻刻」（『国語国文学研究』第53号、2022年3月）

研究発表

- ・「桂離宮の空間と和歌—久我美子『桂能里の紀行』」東アジア伝統文化研究会、2022年3月26日予定、オンライン開催

三澤 純

各種委員会

熊本市町界町名審議会委員長、くまもと文学・歴史館協議会委員、御船町文化財保護委員

論説

- ・「古文書実習の成果を現実社会へ」、『2021年度 古文書実習調査報告書』（熊本大学文学部日本史学研究室）

講演

- ・「熊本城廃棄申請書の成立事情と『御城拝見』」、2021年度熊本大学附属図書館貴重資料展オンライン講演会

安高啓明

各種委員会

大田区立勝海舟記念館作業部会委員、八代市立博物館未来の森ミュージアム協議会委員、天草市立天草キリシタン館運営委員、上天草市史編纂委員、上天草市歴史資料室基本計画策定委員、南島原市有馬キリシタン遺産記念館資料収集検討委員会委員、南島原市フィールドミュージアム基本計画策定事業プロポーサル審査委員会委員

著書

- ・単著『潜伏キリシタンを知る事典』（柘風舎、2022年1月）
- ・単著『上天草市史 姫戸町・龍ヶ岳町編 近世天草の支配体制と郡中社会』（上天草市、2022年3月）

論文・史料紹介・書評等

- ・「上田家文書調査第一次中間報告—新出キリシタン関連資料」（『天草市キリシタン資料館年

報』第2号、2021年6月)

- ・「熊本藩徒刑と佐賀藩徒罪の比較検討」(今村直樹・小関悠一郎編『熊本藩からみた日本近世』吉川弘文館、2021年9月)
- ・「天草の潜伏キリシタンの信仰対象の特質と転化」(下園知弥・宮川由衣編『宣教師とキリスト教』西南学院大学博物館、2021年11月)
- ・「近世天草における司法構造と調整機能—長崎奉行と大庄屋の司法的役割を通じて」(『汲古』第80号、2021年12月)
- ・「天保期長崎代官の預所天草支配体制—流人の管理と処分の観点から」(『長崎市長崎学研究所紀要 長崎学』第6号、2022年3月)
- ・「キリシタン禁制の展開」(南島原市教育委員会世界遺産推進室編『鈴木秀三郎コレクション I』、2022年3月)
- ・「長崎奉行所による遠島刑執行体制—長崎地役人の職務内容の分析から」(山田悠太郎と共著)(『法史学研究会会報』第25号、2022年3月)

講演・学会

- ・「佐賀藩海軍意識と近代化の系譜」佐野常民と三重津海軍所跡の歴史館、2021年10月24日
- ・「禁教社会の形成と潜伏キリシタンの存在形態」京都大学「生涯学」第3回、2022年3月6日
- ・「上天草市の歴史—大庄屋と庄屋」上天草市いきいき成人大学、2022年3月17日
- ・「古文書入門」熊本市東部公民会自治会、2021年度毎月第1・第3水曜日
- ・「古文書を読む」NHK カルチャー熊本教室、2021年度毎月第1・3金曜日
- ・「古文書で読む肥後・天草キリシタン史」NHK カルチャー熊本教室、2021年度毎月第2金曜日

4. 記者発表要旨

- (1) 「佐賀の乱」時の細川家世子をめぐる熊本での騒動を示した新史料を発見
- (2) アメリカでの熊本洋学校の教師人選に関する一次史料を発見



令和3年4月22日

報道機関 各位

熊本大学

「佐賀の乱」時の細川家世子をめぐる 熊本での騒動を示した新史料を発見

(ポイント)

- 明治7(1874)年2月、佐賀県で明治政府に対する士族反乱「佐賀の乱」※が起こった際、政府の軍隊である熊本鎮台が旧熊本藩主細川家の世子(世継ぎ)を熊本城内に移そうとしたところ、それに旧熊本藩士族が強く反発した騒動があったことを示す日記が、熊本大学所蔵の「松井家文書」と熊本県立図書館所蔵の「池辺家文書」より発見されました。
- 上記の騒動は、熊本鎮台司令官であった谷干城が、佐賀の乱後に作成した覚書に登場しますが、今回、旧熊本藩士族の日記に関係記述が発見されたことで、確定的な事実として明らかになりました。
- この事実から、廃藩置県後の旧藩主家が、依然として旧藩地・旧藩士族に大きな影響力を有していたことが伺えます。

(概要説明)

熊本大学永青文庫研究センターの今村直樹准教授は、松井家文書及び池辺家文書の調査から、佐賀の乱にともなう熊本の騒動を示す日記を発見しました。これは、従来知られることがなかった、他県での士族反乱により誘発された旧熊本藩士族の騒動を生々しく物語るものです。

佐賀の乱にともなう熊本の騒動は、熊本鎮台司令官の谷干城が、佐賀の乱後に作成した覚書に記されています(「明治七年二月佐賀県士結党の件」『谷干城遺稿三 続日本史籍協会叢書』〔東京大学出版会、1976年覆刻版〕)。しかし、今回、鎮台側ではなく旧藩士族側である松井家及び池辺家の文書から、かつ当時の日記に関係記述が発見されたことで、上記の事実が確定されるとともに、騒動の全体像が初めて明らかになりました。

(説明)

[背景]

明治4(1871)年7月の廃藩置県により、旧藩主は旧藩地を離れて、東京に移住します。しかし、その家族には、政府の許可のもと、廃藩後も旧藩地に居住する者がいました。旧熊本藩主細川護久の世子護成(建千代、1868-1914)もその一人です。佐賀の乱が起こった明治7(1874)年当時、5歳の彼は、多くの家人とともに北岡邸(現北岡自然公園、熊本市中央区横手)に住んでいました。

[研究の内容]

明治7(1874)年2月、江藤新平らをリーダーとする士族反乱が佐賀で起こります(佐賀の乱)。最初にその鎮庄にあたったのが、熊本城を本営とする政府の軍隊である熊本鎮台です。しかし、佐賀に軍隊を派遣したため、本営自体の兵力が不足する事態になりました。当時の熊本では、佐賀に呼応した旧熊本藩士族による反乱が懸念されており、熊本鎮台の一部は、彼らの旧主の世子である護成を熊本城に移すことで、反乱の未然防止をはかります。しかし、旧藩士族は鎮台が護成を人質にするものと認識して強く反発し、護成がいる北岡邸を警固するために1,000人余が集まり、鎮台側と一触即発の事態となりました。こうした熊本の混乱は、2月17日から数日間続きました。

今回発見された日記は、旧熊本藩第一家老家の松井家と旧藩士族のリーダーであった池辺吉十郎のもので、松井家の日記は、熊本大学永青文庫研究センターが取り組んでいる松井家文書の調査の過程で発見されました。

以下、新発見史料の解説文と現代語訳です。なお、虫損・破損により判読困難な文字を□で示しています。

①「明治七年 日記」(松井家文書)2月19日条

【解説文】

一、熊本ニ於みて井上萬蔵列方左之通、

熊与早打を以申遣候、爰許鎮台動揺ニ付而者申談、所々探索ニおよひ候得共、一体之議定ハ相分兼候へ共、県士之内二十輩、三十輩ニて北岡邸江為警衛□出候模様ニ而、溝口家杯も五、六十輩ニ□相成、段々小銃を携へニ相成候を□孫六見受申候段申出候、

(中略)

一、鎮台方

^{本ノマ、}瀧千代様御儀を御城内江御移ニ相成度旨、此許県士衆之内、横山・林某を以、御内家江懸合ニ相成候処、御断ニ相成、就而者御後口ニ丘焉様を初、其外県士之面々為御固メ千余之詰方、□解寺近辺之寺院江詰方ニ相成□段、別紙認メ候内ニ承り申候□、^(事)
二月十八日

【現代語訳】

一、熊本の井上萬蔵(松井家家人)たちから次のような報告があった。急ぎの手紙で報告します。こちらでは鎮台の動揺のため、旧藩士族(県士)が20人、30人の集団で、北岡邸の警固に集まっている模様です。溝口家(旧熊本藩家老家)などは、50、60人の集団で、小銃を携えている様子を孫六が見たとのことです。

(中略)

一、鎮台から、建千代(護成)様を熊本城内に移したい旨、旧藩士族の横山・林某を使者として細川家北岡邸に打診がありましたが、同邸は

お断りになりました。そこで、細川家一門（内膳家）の休焉（忠顕）様をはじめとする旧藩士族の面々が、北岡邸の警固のために1,000人余も集まっています。妙解寺付近の寺院に詰めている旨、別紙を作成中に聞きました。

明治7年2月18日

②「明治七年甲戌日記」（池辺家文書）2月17日条

【解説文】

十七日 中村同道出府、去ル十五日方佐賀県士鎮台兵与戦争相始候趣報知有之、熊本城之鎮兵大混雑、池軍氏参、旧同郷中決而雷同有之間敷段示談、加々尾を訪、遂住江氏参、鎮兵より北岡公子を城内江迎入候哉之風説有之、不期して北岡ニ参る県士、数を知らず、休焉殿達鎮静有之候得とも大混雑なり、

【現代語訳】

2月17日 中村信雄とともに熊本に出る。去る15日から佐賀県士族と鎮台兵との戦争が始まったとの知らせがあり、熊本城の鎮台兵は大混雑している。池辺軍次氏が参り、我々は決して佐賀に雷同しないことを示談した。加々尾を訪ね、次いで住江甚兵衛氏が参った。鎮台兵が北岡邸の公子（護成）を城内へ移そうとする噂があり、思いもよらず北岡邸に集まる旧藩士族が多く、彼らを細川休焉（忠顕）殿たちが鎮めているが、大混雑である。

[意義]

- 1、佐賀の乱にともなう熊本の騒動は、これまで一般的に知られておらず、この騒動について記した熊本鎮台司令官の谷干城による覚書も、佐賀の乱後に作成されたものでした。しかし今回、騒動当時の史料が、鎮台側ではなく旧熊本藩士族側から発見されたことで、事実が確定されるとともに、騒動の全体像が初めて明らかになりました。
- 2、谷干城による覚書では、護成を警固するため、北岡邸に集まった旧藩士族の数が「数百千」と記されています。しかし、①の松井家家人による報告書からは、その数が1,000人余であった事実を確定することができました。また、北岡邸警固の中心を細川家一門である内膳家が務め、そこに旧藩家老の溝口家も参加していることから、廃藩置県後も旧藩主家の運営において、旧上級家臣が大きな役割を果たしていたことがわかります。
- 3、廃藩置県後、旧藩主家は東京に移住したため、その旧藩地への影響力は弱められ、再び影響力がみられ始めるのは、西南戦争後の明治10年代以降だと理解されています。しかし今回の発見で、旧藩主家の世子の危機を察した旧藩士族が、大挙してその警固にあたったことがわかり、廃藩置県後も旧藩主家が、旧藩地・旧藩士族に依然大きな影響力を有していたことが明らかになりました。こうした旧藩主家の存在は、当時の鎮台や県にとっても無視できないものがあつたと考えられます。

なお、騒動に巻き込まれた細川護成は、明治9（1876）年10月の士族反乱

「^{しんぷうれん}神風連の乱」でも、旧藩士族である敬神党の一部が彼の擁立を図ったため、宇土への避難を余儀なくされます。その後、彼は父である旧藩主護久の決断で、同年12月に東京に移住しました。明治26（1893）年9月、彼は父護久の死を受けて、細川家の家督を相続しました。

[用語解説]

※佐賀の乱…明治7（1874）年2月、佐賀県で起こった明治政府に対する士族反乱。征韓論に敗れて帰郷した前参議江藤新平らを中心として、佐賀県の士族が「征韓・旧制度復活・攘夷」を唱えて挙兵したが、政府軍に鎮圧された。

[公開情報]

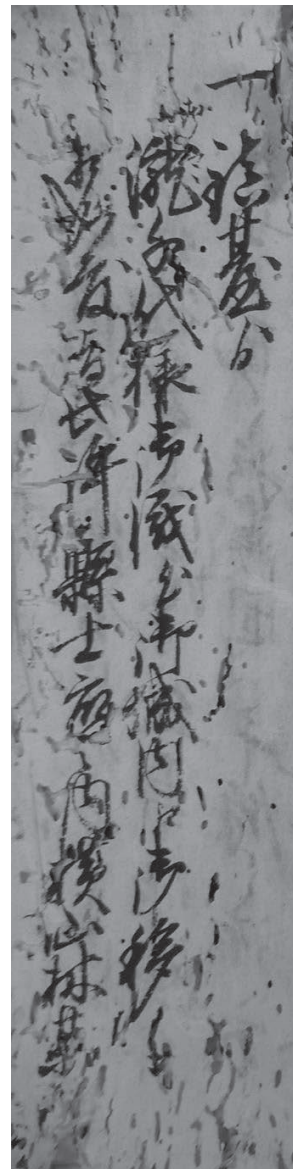
「明治七年 日記」（松井家文書）は、本年11月開催予定の附属図書館貴重資料展で公開される見込みです（文書の傷みが激しいため、パネル展示の予定）。

*** 永青文庫研究センター**

熊本大学附属図書館には、「永青文庫細川家資料」（約58,000点）や細川家の第一家老の文書「松井家文書」（約36,000点）の他、家臣家や庄屋層の文書群計10万点あまりが寄託・所蔵されており、永青文庫研究センターではこれらの資料群について調査分析を行っています。



細川護成（10代後半）
（公益財団法人永青文庫提供）



「明治七年 日記」2月19日条
（松井家文書、熊本大学所蔵）

【お問い合わせ先】

熊本大学永青文庫研究センター

担当：（准教授）今村 直樹

電話：096-342-2304

e-mail: eiseiken@kumamoto-u.ac.jp



令和3年10月19日

報道機関 各位

熊本大学

アメリカでの熊本洋学校の教師人選に関する 一次史料を発見

(ポイント)

- 明治4年(1871)9月に開校した熊本洋学校くまもとようがっこうの外国人教師について、その人選が約一年前からアメリカで行われていた事実を示す書簡が、熊本大学所蔵の「幸家文書」ゆきけより発見されました。
- この事実から、熊本洋学校の教師探しは、アメリカで早期に着手されながらも、明治4年8月のジェーンズの赴任に至るまで、難航した様子がうかがえます。

(記者発表について)

本研究成果について、Zoomを利用して詳細を説明する機会を以下のとおり設けます。参加を希望される場合は、熊本大学総務部総務課広報戦略室まで、メール(sos-koho@jimu.kumamoto-u.ac.jp)でご所属とお名前をご連絡ください。折り返し詳細をご連絡いたします。

〈日時〉 令和3年10月26日(火) 10:00～11:00

※恐れ入りますが、準備の都合上、10月25日(月)17:00までにご連絡願います。

(概要説明)

熊本大学永青文庫研究センターの今村直樹准教授は、熊本洋学校の外国人教師の人選が、明治3年9月からアメリカで行われていた事実を示す書簡を発見しました。この新出書簡は、熊本藩留学生としてニューヘブーンに滞在中の津田静一つだせいいち(1852-1909)が、日本にいた父の山三郎さんざぶろうに宛てた一次史料です。この発見により、アメリカでの洋学校教師の人選が、熊本藩の依頼を受けて早期に着手されていたこと、それに現地の熊本藩留学生が深く関わっていたことが、初めて確認されました。

(説明)

[背景]

明治3年6月、熊本藩では新しく知藩事ちはんじに就任した細川護久ほそかわもりひさのもと、横井小楠よこいしょうなんの思想的系譜をひく実学党じつがくとうが政権を掌握し、藩政改革が進められました。改革は文教政策にもおよび、翌7月には藩校時習館じしゅうかんが廃止されました。以降、熊本藩では西洋の学問教育の振興を図るため、洋学を学ぶ教育機関(洋学校)の設立準備に着手するとともに、外国人教師の雇い入れが計画されました。その頃は全国でも、洋学校の開設が進められていました。

熊本藩の洋学校設立準備に尽力したのが、小楠の甥である横井大平よこいだいへい(1850-1871)です。大平はアメリカへの留学経験を持ち、恩師であるキリスト教オランダ改革派教会の宣教師フルベッキに働きかけ、外国人教師の招聘をはかろうとしました。当時、東京にいたフルベッキが、アメリカの同教会外国伝道局のフェリスに宛てた明治3年7月24日(1870年8月20日)付の書簡によると、大平から熊本藩が外国人教師として米国陸軍の退役軍人を求めている旨の申し出を受けたため、アメリカでのその人選をフェリスに依頼しています(高谷道男編訳『フルベッキ書簡集』新教出版社、1978年)。しかし、それに対するフェリスの回答はなく、同年10月17日(1870年11月10日)付のフルベッキ書簡では、急ぎの回答をフェリスに促しています(前掲『フルベッキ書簡集』)。また、前述の明治3年7月24日付のフルベッキ書簡では、大平がアメリカ留学中の兄左平太さへいた(1845-1875)に対しても、退役軍人招聘の件で手紙を書く予定だと記されています。しかし、フルベッキや大平の依頼を受けて、アメリカで実際に人選が行われたかどうかは、これまでは未解明のままでした。

[研究の内容]

今回発見された書簡は、熊本藩留学生としてアメリカ滞在中の津田静一が、東京にいた父山三郎に宛てた明治3年9月21日(1870年10月15日)付のもので、静一は、明治2年10月にイギリス留学のため横浜を出発しましたが、予定を変更してアメリカのニューブランズウィックで学ぶこととし、当時はウエスト・ポイントの陸軍士官学校への入学を希望してニューヘブーンにいました(高木不二『幕末維新期の米国留学』慶應義塾大学出版会、2015年)。

静一は書簡のなかで、熊本もとだながざねの元田永孚からの書状で細川護久による藩政改革を知らされ、その盛名が遠からず天下に轟くものと「雀躍じゃくやく」している旨を伝えています。さらに、熊本藩が設立する「英学校」(洋学校)の教師をアメリカから雇い入れるため、すでにフェリス宛に依頼があったこと、横井大平からもその人選に尽力するよう連絡があったため、及ばずながら静一自身も「探索」していると書かれてあります。この記述により、日本のフルベッ

キと大平からの依頼が、約二か月後（明治3年9月）の時点でアメリカのフェリスと静一のもとに届き、教師の人選作業が始まっていた事実がわかりました。大平は、留学中の兄左平太だけではなく、静一にも人選を依頼していたのです。熊本で洋学校の設立趣意書が制定されたのは、同年11月のことであり、アメリカでの人選作業の着手の早さがうかがえます。

本史料は、2019年度に永青文庫研究センターが古書店から購入した、旧熊本藩士幸準蔵^{ゆきじゅんぞう}の関係史料（幸家文書）から発見されました。幸は、当時熊本藩の要職（監察^{かんさつ}）を務め、知藩事の護久と近い距離にあったため、書簡の宛先である津田山三郎が、息子から届いた書簡を護久に見せるため、幸に渡した可能性が高いと考えられます。

以下、新発見の津田静一書簡（洋学校関係箇所）の解説文と現代語訳です。

【解説文】

此節英学校御取建ニ相成り候ニ付、当国より教師御雇入之筈ニ而、已ニフェリス迄御頼越ニ相成居候間、私共より茂人選等尽力仕候様、横井大平より申越し、被不及専ら探索仕居申候、実ニ諸事一時ニ運セられ、且如是洋学御誘ニ相成候へ者、必不日ニ賢才俊傑群り起らん乎、

【現代語訳】

このたび熊本藩による英学校の設立にあたって、アメリカより教師を雇い入れることとなりましたので、すでに熊本からフェリスまで教師人選の依頼が来ました。私たちも人選に尽力するよう、横井大平から連絡がありましたので、当方も及ばずながら探し求めています。じつに藩政改革によって諸事が一気に進展し、かつこのように洋学校の開設も進めば、数多の優れた人物たちが、すぐ育成されることでしょう。

[意義]

- 1、熊本洋学校の外国人教師の人選が、明治3年9月の時点で、アメリカで着手されていたことは、本史料の発見で初めて明らかになった事実です。また、アメリカでの教師人選に、若い熊本藩留学生（津田静一）が具体的に関与していた事実も、本史料で確定することができました。
- 2、その後、熊本洋学校の教師として来日したのは、アメリカ陸軍の退役軍人であったジェーンズですが、その赴任は、廃藩置県^{はいはんちけん}で熊本藩が消滅した明治4年8月のことでした。ジェーンズによると、日本行きの打診が来たのは「1871年（明治4年）の春早く」のことで、決断まで時間がかかったと回想しています（フレッド・G. ノートヘルファー著／飛鳥井雅道訳『アメリカのサムライ』法政大学出版局、1991年）。つまり、洋学校の教師探しは、アメリカの地で早期に着手されながらも、その赴任まで約一年間を要

し、非常に難航した様子がかがえます。

- 3、静一は、書簡の中で、洋学校の開設により、熊本藩の人材育成が進むことに強く期待を寄せていますが、一方で、「洋学とは心を正し、身を修める学問ではなく、ただ知識を開き、修業するための学問である」とも述べています。ここからは、当時の日本人による洋学受容の基盤となった「東洋道徳・西洋芸術」という観念がみてとれます。

[用語解説]

※熊本洋学校…明治4年9月に開校した旧熊本藩立の学校。横井小楠の流れをくむ実学党によって興され、アメリカ人 L.L. ジェーンズを迎えて自然科学・地理・歴史などを教えた。明治9年8月、ジェーンズの任期切れをもって廃校となった。

[公開情報]

津田静一書簡の画像は、熊本大学附属図書館オンライン貴重資料展「廃藩置県と熊本藩」（下記ウェブサイト）で、10月27日（水）から公開予定です。

<https://www.lib.kumamoto-u.ac.jp/about/events/onlinekichoshiryo/r3>

***永青文庫研究センター**

熊本大学には、「永青文庫細川家資料」（約 58,000 点）や細川家の第一家老の文書「松井家文書」（約 36,000 点）の他、家臣家や庄屋層の文書群計 10 万点あまりが寄託・所蔵されており、永青文庫研究センターではこれらの資料群について調査分析を行っています。

【お問い合わせ先】

熊本大学永青文庫研究センター

担当：准教授 今村 直樹

電話：096-342-2304

e-mail：eiseiken@kumamoto-u.ac.jp

5. 講演要旨

- (1) 稲葉継陽「戦国時代の西岡と藤孝・光秀—熊本に伝わった古文書を中心に—」
- (2) 今村直樹「廃藩置県後の旧藩主細川家と旧藩士」

戦国時代の西岡と藤孝・光秀——熊本に伝わった古文書を中心に——

長岡京ガラシャ祭歴史講演会

2021年11月14日 於京都府長岡京記念文化会館

熊本大学 稲葉 継陽

はじめに

- (1) 個人的回顧談：乙訓惣国研究から近世初期細川家研究へ、そして乙訓西岡研究への回帰
- (2) 乙訓西岡での地域史研究、熊本での「永青文庫細川家文書」研究の進展
 - ➡共和制的な地域社会と大名権力（君主制）との対抗という政治構造の基本を踏まえつつも、単純な図式の焼き直しを打破する研究段階へ→私の関心(3)(4)
- (3) 「兵農分離」と「日本中世・近世史」の枠組み——日本史の常識？——
 - 1) 中世の武士領主は「兵農未分離」
荘園体制のもと地域に根を張った自立的な「在地領主」、戦乱・自治・下剋上の主体
 - 2) 近世の武士領主
国替等による在地からの分離、知行地支配の権限制約から俸禄制へ→武士の自立性の剥奪
 - 3) こうした「兵農分離」の過程は「公儀権力」（幕藩国家）の形成過程、「世界史的にも稀な集権的封建国家」の形成に不可欠の条件
 - ➡「兵農分離」を基礎にした「幕藩制構造論・国家論」（「日本近世史研究」不動の枠組み）に収まらない要素が軽視ないし無視される傾向、しかし近世社会を構成している要素はもっと豊かなはず
- (4) 交通の要衝である西岡を拠点に戦国動乱の最前線に立った藤孝と光秀は、何を経験共有して実践にいかしたか

1. 乙訓惣国と細川藤孝

(1) 共和国としての乙訓惣国

1) 長享元年（1487）の「惣国大儀」（史料1～4）

①細川政元が被官の上田林に西岡中の敵方闕所地を給与すべく権限発動 ②「国衆」から「屋形」（政元）へ停止を要求、過分の「礼銭」が必要 ③「国」から西岡の「郷々」に郷の規模に応じて（「大郷小郷ニ当候て」）出銭を割り当て ④各郷の住民組織「地下」は沙汰人を表に立ててそれぞれの領主に礼に出銭への協力を強く要求

2) 明応7年（1498）の「国持」「一味（＝一揆）」（史料5～10）

①細川政元が被官の香西又六に乙訓を含む山城「五郡内寺社本所領并在々所々年貢・諸公事物五分一」と百姓夫役動員権を付与すると乙訓郡内「国人中」「名主沙汰人中」に通達 ②「乙訓郡之面々朝暮致談合」（於向日宮国々之寄合）、乙訓郡を「国持ニ」「一味」して（国全体として一揆して）免除要求 ③長享元年と同様の方法で禮物を捻出し、香西のもとに上洛し「国なミ（次）」の礼に出て免除を交渉

【国衆】小野、鶏冠井、竹田、物集女、神足、高橋、野田ら

【定義】自分たちの地域・故郷という意味としての「国」、すべての国衆と郷々が「一味」＝一揆した重層的政治組織としての「惣国」「国持」

【要求】細川政元直臣の戦時権限設定による地域情勢の不安定化を回避／百姓らは政元被官による夫役動員を忌避／単純な負担増を峻拒して領主に「御合力」を厳しく要求する「地下」

【実態】「地下」（名主百姓層）の利害をも汲み取った国衆の「寄合」＝合議による意思決定

→共和制的な地域運営によって危機対応の政治的集中を時限的に実現

(2) 細川藤孝と勝龍寺城

勝龍寺城、16世紀中葉には西岡国衆の結集核に（参考文献仁木論文）→永禄11年の三好政権崩壊とともに信長・義昭連合政権下で細川藤孝が勝龍寺城に入る

1) 勝龍寺城の普請

勝龍寺城普請夫役の賦課実現は領域支配権の源（史料11、12）

2) 藤孝にではなく「当城」に忠節を誓う西岡国人（史料13）（ex. 中世後期の地域住民による「時之公方」という権力観）

→勝龍寺城を拡張するとともに、一族家老を配置して領域支配の拠点化（後述）

(3) 細川藤孝と国衆・「国」

1) 「一職支配」の内実 (史料14)

元龜4年(1573)7月、足利義昭の没落とともに信長は「桂川西地」の「一職(職)」支配権を藤孝に付与
その内実は、一定の領域に対する統治権的支配権と主従制的支配権を合せた権限

→藤孝は用水紛争を裁定しつつ、国衆の所領を安堵＝保障し新知も給与(革嶋氏、志水氏など史料伝存)

2) 物集女疎入生害問題が示すこと (史料15)

一貫して国衆の中核にあった物集女氏を藤孝が討ったのは、両者の間に政治的軋轢があったにもかかわらず、一職支配を開始してから2年後のこと

→藤孝は「国」＝西岡地域社会の構造を簡単に否定して国衆を圧伏できたわけではない、だから…

3) 藤孝の丹後国替と「国」(史料16)

天正8年(1580)の藤孝丹後国替後に信長の勝龍寺城代となった矢部・猪子は、国衆寺戸家清に「案内」されて、「国次之御礼」を受けることで領域支配者として地域諸勢力から認証される

→次々と替る領主たち(「時之公方」)は、ときに「惣国/国持/国次」として政治権力を顕在化させる地域社会へ依存することによって、領域支配実現の条件が得られる。いわば「国に居座らせてもらっている領主」

2. 西岡国衆出身の細川家臣——寛永期(1620~30年代)の神足氏と築山氏——

※「山城国西岡御領知之地区」にみえる「神足屋鋪」「築山屋敷」「沼田屋敷・沼田丸」に注目

(1) 細川家臣神足三兄弟と神足の「神足掃部」家

1) 中世神足氏と神足掃部(←「神足家系」、参考文献馬部論文、松永論文、福島論文)

將軍直勤御家人の西岡国人/神足城は小塩莊政所屋敷/神足城から勝龍寺城へ/織豊期の「神足掃部」は足利義昭に仕え、信長・藤孝に接近し「神足屋敷」(「神足在」)に居住して「郷土」となる/掃部の子息5人のうち3人が細川家に仕えたとされる

→寛永期(1630年代)の永青文庫細川家文書に掃部子息の神足三兄弟の存在と動向を示すの史料が伝存

2) 神足三郎左衛門尉・八郎左衛門尉・少五郎の動向と神足(史料17~20)

①三兄弟と「在所」＝神足

▼八郎左衛門尉、忠利に供奉して小倉から伏見に登ったとき、「在所」を訪問するため二日間の御暇を申請し、忠利に許可される(史料17)

▼正保3年(1646)、忠興に「すりきれはて」るまで奉公した少五郎は、細川家を辞し「在所へ罷上」る、つまりUターンを申請し許可される(史料20)

②「神足掃部跡」の維持再興(史料18)

寛永10年(1633)年8月、細川家に奉公することによって神足掃部跡を維持してきた三郎左衛門尉(肥後国替前は規矩郡奉行に登用)は、神足にいる老母の病に直面し、「掃部跡」＝神足本家を継承するため細川家を辞すと申し出、忠利は神足掃部の跡目を立てるためならと、知行(200石)も取らせたままで神足に移住するよう裁可

③給人神足各家の維持

▼寛永15年、八郎左衛門尉が島原一揆で討死し、9歳の子息が跡目を継ぐ。神足から熊本まで御礼に下向した三郎左衛門尉は、子息が成人するまで知行地(200石)を御代官預りとし没落を防止するよう要望し認められる(史料19)

▼親類たちの「合力」に助けられながら忠興に長年奉公した少五郎の引退について、兄三郎左衛門尉が忠興側近の志水次兵衛(これも西岡国衆出身か)を通じて忠興家老衆に申し入れ(史料20)

④細川忠興との主従関係の特質

三郎左衛門尉は、少五郎を召出すとき忠興が「いつであっても御暇を申請すれば許可する」との意向であったと証言(史料20)

【小括】

(a) 細川家中の知行取となり要職に登用されていても、三兄弟は「在所」＝神足との関係を強く維持しつづけた。わけでも三郎左衛門尉は熊本から神足に帰って掃部跡をまもり、「畿内の名字の地に在地する国持大名直臣」となり(ex. 革嶋氏、築山氏)、島原で討死した八郎左衛門尉の家の維持や少五郎家の代替りの実現に主導権を発揮

(b) 忠興・忠利と神足掃部子息たちとの主従関係は、従者側に契約解除の自由が留保されることで名字の地との関係が維持され、現実には主君側が本家維持のための御暇申請を許可するなど、上位者絶対優位の主従制や兵農分離の貫徹といった近世史研究の道具立てでは説明できない特質をもつ

(2) 淀の細川家臣築山氏

※2016年熊本地震で被災した築山邸から忠興・忠利書状26通を含む未紹介の文書群がレスキュー

1) 中世の築山氏と室町幕府・細川家

① 「築山与九郎先祖附」(史料21)

▼築山氏は室町将軍の奉公衆、名字の地は乙訓郡築山(東久世荘)、所領は築山・水垂(淀)・下津(淀)の3箇所
▼代々将軍に奉公し、天文3年(1534)築山兵庫介貞俊は沼田光兼(近江・若狭国境の熊川宿を本拠とする奉公衆)とともに細川藤孝の誕生に立ち合い、その後、藤孝に奉公する→藤孝家臣団の形成

② 「沼田家系図」(永青文庫細川家文書)にみる姻戚関係

築山貞俊の妻は沼田光兼娘、藤孝、荒川晴宣、飯川信堅の妻も光兼娘、松井康之妻は光兼孫娘
➡沼田光兼を核とした幕府奉公衆の姻戚集団が初期の細川家臣団を構成し、後の細川家老家となる
築山家も家老家となるべき由緒を有する…勝龍寺領の構造に反映

2) 桂川・淀川の河川交通支配と勝龍寺城内の「築山屋敷」(永青文庫「西岡御領知図」)

①信長からの勝龍寺城拝領後も所領を維持、その所領配置は桂川―淀川の河川交通を支配するもの
②築山領水垂の「舟渡」から勝龍寺城内に川・堀を渡って入った所にある「築山屋敷」…絵図と現況一致
→沼田・松井・米田らとともに城内に屋敷を持ち、桂川・淀川の流通交通と勝龍寺城とを結び付ける役割を担ったとみられる(水垂の淀姫大明神は桂川の水運の守護神、現在も御旅所あり)

3) 細川家の国替と築山氏

天正8年(1580)の丹後国替、慶長5年(1600)の豊前国替、寛永9年(1632)の肥後国替に際しても築山家は淀の本領と屋敷を維持し(細川家史料4-910)、九州国替後は台所料と肥後での知行を拝領(史料21、22)
→以後、築山家の存在形態はじつに幕末まで一貫

(3) 寛永期における築山兵庫の活動(史料23~26)

1) 築山兵庫保春らの役割——三斎・忠利の築山兵庫宛書状(築山家文書)から——

① 細川家への政治的奉仕

将軍家光の上洛に際して、忠利は築山兵庫から京・大坂での情報を得るとともに、上洛に従う忠利自身の淀での着替え場所や、川船を調達してもらっていた

② 細川家への経済的奉仕

大坂市場の米価や、それに大きな影響を与える旱魃・大雨、あるいは上方の地震や北陸の大火に関する情報も、兵庫はいち早く三斎・忠利に伝えていた

③ 細川家への文化的奉仕

兵庫は宇治の一流茶師である上林味ト・竹田紹清に三斎の書状を取り次いでいた。上質の茶を調達するため。利休七哲の一人として著名な三斎の九州での茶の湯を支えたのも築山兵庫

④ 細川家の姻戚公家への奉仕

公家・飛鳥井家や烏丸家の領地からの年貢徴収業務を請負うなどの経営支援

2) 伏見への進出と活動

① 伏見町人衆の統率(史料27)

忠利上洛に際して「伏見町人衆」が大坂・草津辺りまで「御迎」に出るか出ないかは、築山兵庫の統率によった→築山兵庫と細川家取引の「伏見町人衆」とのネットワークの存在と機能

② 寛永10年(1633)の伏見蔵屋敷購入(史料28)

▼細川家御用商人末次藤右衛門が銀子を用立てて蔵屋敷を購入→淀川水系(新宇治川)の要地としての伏見町の発展

▼蔵屋敷の名義を「細川越中守」にして町役免除を狙う…伏見での商業活動も細川家への奉仕の一環

【小括】

- (a) 築山兵庫の活動の前提には畿内の河川流通・経済の拠点である淀で室町期以来つちかかってきた政治・経済上のネットワークが存在、九州大名細川家の政治・経済・文化にとって、京・大坂の結節点における築山家の働きは、たのみの綱
- (b) 遠国の大名家が三都とのつながりを維持するためには、大名家の公的組織の外側で、中世以来の独自の社会関係を基盤に現地で暗躍する家臣が必要

3. 藤孝・光秀の活動と西岡

(1) 西岡と大坂・丹波

西岡勝龍寺は大坂・丹波と至便の地→大坂本願寺方との交通を管理、丹波侵出兵站の拠点ともなる（史料29）

→光秀・藤孝合同の軍事行動が必然化、西岡国衆出身の家臣たち（細川家では「勝龍寺以来」と呼ぶ）も藤孝に伴って転戦（「志水家文書」には志水宗加の軍忠状も伝来）

(2) 戦場の地獄をみた藤孝・光秀——越前で、丹波で、大坂で——

①一向一揆との恐怖の戦闘（史料30）

天正3年（1575）8月、越前一向一揆攻めの現場で滝川一益に「降参した一揆勢も全員首を切れ」と指示する信長、その黒印状を回し読みする藤孝・光秀ら部将たち→一揆衆への恐怖が信長への権力集中を実現

②丹波での活動（史料31、32）

▼天正3年、丹波諸侍を動員して大坂で本願寺への「合城」（敵城攻略用の城）を構築

▼光秀の丹波攻めに際して「大軍」が通行可能な軍道を15日間で整備するよう信長に厳命される藤孝

③石山本願寺攻めの地獄から荒木村重の謀反へ（史料33、34）

▼天正6年、石山城に籠城の「男女」は助命せよ、ただし本願寺の権力を構成する「坊主以下」は絶対に許さな、と信長に厳命される藤孝・光秀→誰を助け、誰を殺すかという究極の戦場

▼同年の摂津における荒木村重の反乱には光秀と「相談」しながら対処するも長期化

→藤孝・光秀は畿内及びその周辺の戦国動乱が最も激化し、内戦と統治との、信長と直臣部将との矛盾が和解不可能なレベルにまで高まった現場につねにおり、経験を共有し、行動

→畿内における近世的統治の基盤を構築し、信長を止めた光秀／内戦の渦中で「古今伝授」の講釈をうけ、相伝者の立場から秀吉の文化プレーンとして古代以来の国家統合の権威的＝文化的核心を王家に秘伝した藤孝
その素地は西岡時代に形成

おわりに

- (1) 西岡国衆出身家臣の本貫地との強い結合を近世初期細川家歴代当主も尊重し、むしろ九州と上方を結び付ける存在として依存→神足氏や築山氏の実例を近世社会・国家像の見直しの呼び水に
- (2) 日本近世に長く維持された「惣無事」「天下泰平」は、地域からの平和創出すなわち「惣国」的实践と、光秀・藤孝らの政治的实践の延長線上に実現すると考えるべき
そのようなものとしての乙訓西岡地域史をひろく学んでいくことの意義深さ

【主な参考文献】

稲葉継陽「明智領国の形成と歴史的位罫」（藤田達生編『織田政権と本能寺の変』塙書房、2021年）

仁木 宏「戦国期京郊における地域社会と支配」（本多隆成編『戦国・織豊期の権力と社会』吉川弘文館、1999年）

馬部隆弘「神足家旧蔵文書の復元的考察」（『史敏』12、2014年）

松永和浩「西岡国人神足氏と室町幕府」（『史敏』12、2014年）

福島克彦「勝龍寺城研究の再検討」（長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書 第73冊』、2019年）

湯浅治久「革嶋氏の所領と乙訓郡一揆」（同著『中世後期の地域と在地領主』吉川弘文館、2002年、初出は1989年）

向日市文化資料館『戦国時代の物集女と乙訓・西岡』（展覧会図録、2020年）

長岡京市教育委員会『長岡京市歴史資料集成1 勝龍寺城関係史料集』（2020年）

廃藩置県後の旧藩主細川家と旧藩士

永青文庫研究センター 今村 直樹

はじめに

キーワード 廃藩置県、細川護久、藩政改革、細川家資料、神風連の乱

- ◇ 明治4年(1871)7月の廃藩置県…諸藩による分割統治を否定、中央集権的な国家体制の創出を意図
→長きにわたる武家支配の時代を終わらせる日本史上の重要な画期、現代日本の起点の一つ
- ◇ 廃藩置県をめぐる諸研究…廃藩置県は新政府でどのように準備されたのか、廃藩置県をもたらした政治・社会・経済・思想的な要因、なぜ廃藩置県が必要だったのか、などの論点に力点
→廃藩置県に至る経緯が重視される一方で、廃藩置県の「その後」についての研究は手薄な印象
⇒地域史の視点から廃藩置県をみるとき、それに藩側がどのように反応したか、という研究が必要か
- ◇ 廃藩置県後の旧藩主(知藩事)・旧藩士・旧藩地をめぐる一般的な理解…廃藩への大きな反対はなく、藩体制は一挙に解体され、知藩事は旧藩地から東京に移住、藩主と藩士の主従関係も解消、というもの
→しかし、上記の理解はあくまで歴史の結果であり、当時の旧藩側の反応を追っていけば、私たちのイメージとは異なる歴史像もみえてくるのでは？
- ◇ 本講演では、①廃藩置県を熊本藩はどう受け止めたのか、②廃藩後の旧藩士の意識と行動、③廃藩後の旧藩地(熊本)における旧藩主細川家の動向、の三点について、熊本大学保管の古文書に即して検討
→巨大な転換期を生きた旧藩側の人びとの意識と葛藤に迫る

1. 廃藩置県はどう受け止められたのか

- ・ 明治4年7月14日、新政府内で秘密裏に準備されてきた廃藩置県が断行
→廃藩の一報が熊本に届いたのは7月下旬。新設の熊本県は、7月晦日付で管内の士民に対し、国体の確立や政令の統一のため、廃藩置県は当然の措置であると通達¹。熊本県は、旧熊本藩がそのまま移行。県政の首脳部は、知藩事を除けば、廃藩前とほぼ変わらず
⇒旧熊本藩士の上田休(久兵衛、旧知行高200石)は、廃藩の一報に接した8月3日、その日記に「大変茫然、夢の如し」と記し、涙を呑む²
- ・ 他方、廃藩直後には、旧熊本藩知事の細川護久が新県の知事に任命されると考える旧藩士も存在
→旧藩の重役を務めた道家之山(旧知行高100石)は、明治4年8月25日付の息子宛書簡で、東京詰の面々や藩庁の役人などは護久の県知事任命を見込んでいるが、「愚察にてハ決し而其儀ハ出来申間敷」と考えており、10月頃には事情が判明するだろうと述べる【史料1】
⇒なぜ、廃藩にもかかわらず、護久の県知事任命を想定する旧藩士が存在したのか？
- ・ 注目されるのは、明治政府やその要人への提出を想定し、明治4年8月末から同年11月までの間に執筆されたとみられる、旧熊本藩士の幸準蔵(旧知行高100石)の意見書「死罪論」【史料2】
→幸は、廃藩置県を「古今未曾有の御改正」と称賛しながらも、全国の知藩事を一律に免職する措置を痛烈に批判。すなわち、「明治2年の版籍奉還後、治績があがらない知藩事がいるため、藩を廃止する」という廃藩置県の詔書を引用し、逆に治績をあげた者は留任させるべきとして、護久による明治3年以來の藩政改革の実績(大減税政策など)を列挙し、その知事再任を強く訴える

¹ 細川家編纂所編『改訂肥後藩国史史料 第十巻』(国書刊行会、1974年)883-884頁

² 鈴木登編『肥後藩士上田久兵衛先生略伝並年譜』(熊本地歴研究会、1928年)161頁

⇒幸などの旧藩士は、護久の下での先進的な藩政改革に強い自負を持ち、護久の再任を待望

- ・「死罪論」で注意すべきは、旧藩士による天皇への忠誠を否定しているのではなく、天皇への忠誠の前提として、旧藩士による旧藩主への忠誠こそが必要という論理。長年の旧藩主―旧藩士の君臣関係一般が否定されたことに、たとえ全国が一旦は従ったとしても、それは「屈服」であり「心服」にあらず
→幸は、護久の下で改革を進めてきた熊本藩こそが、新たな時代を導く担い手だと自負。その原動力を藩主―藩士の君臣関係に置き、護久の再任を求める（但し、「死罪論」が提出されたかは不明）
⇒しかし明治4年11月、旧熊本藩から移行した熊本県は、その県域を新設の三県（熊本・八代・大分）に分割され、待望された護久の再任は実現せず

2. 廃藩後の旧藩士の意識と行動

- ・ 廃藩置県後、政府関係者は諸藩の反乱を警戒するが、全国的にも旧藩士の武力蜂起は起こらず
→その理由として、旧藩よりも天皇や国家を優先すべきと考える旧藩士一般の存在が想定
- ・ 明治5年4月8日付、東京留学中の宮崎八郎が故郷荒尾の父長蔵にあてた書簡【史料3】
→熊本では「只々細川家を慕ふ人」もいるようだが、それは「天下ノ大勢」を察しない笑うべき者である。君臣の情には抑えがたいものがあるが、天皇や国家のため、忍び難きを忍ぶことこそ、今日では細川家への忠誠を示すものである
⇒幸とは逆に、宮崎は、旧藩主への感情を抑えることが天皇や国家への忠誠につながると認識。細川家を慕い続ける旧藩地の熊本に対しては批判的
- ・ 宮崎書簡における「只々細川家を慕ふ人」が意味する者とはなにか？
→廃藩後、細川家は熊本城を使用できなくなったため、従来は城内で保管されてきた歴代当主の武具類の処遇が大きな問題に。これを受け、武具類の預かりを願い出る旧藩士が続出。大矢野次郎八（旧知行高100石）は、「歴代当主の武具類の整理を布告で知ったため、具足を一領預かりたい」と願う【史料4】
⇒旧主家の宝物を預かる名誉を求めた旧藩士。その後、200名以上の旧藩士に、細川家から歴代当主の甲冑類が預けられる
- ・ また、廃藩後、熊本藩の藩庁文書は熊本県庁に引き継がれるが、県庁はそれを民間に売却。これを受けた旧藩士の坂本彦兵衛（旧知行高100石）は、明治5年6月、県庁で不用となった旧藩庁文書は譲り受けるとともに、民間への流出分は買い戻し、目録を作成することを宣言【史料5】
→注目すべきは、諸藩が「法を取りに来る」ほど高く評価された細川家の治績が、旧藩庁文書の散逸で失われることで、後年の「国史」編纂に支障をきたすという主張。旧藩政への強い誇りが看取可能。その後、収集・整理された細川家文書は、同家の北岡邸（現北岡自然公園）で長く保管
⇒熊本では、依然として旧藩主家との君臣関係を重んじ、旧藩へのアイデンティティを持ち続ける旧藩士が存在（宮崎は批判するが）。廃藩後の彼らは、旧藩の治績を残すことが、後世への貢献に繋がると確信。その行動こそが、現在まで永青文庫細川家資料を伝来させる重要な契機に

3. 廃藩後の旧藩主細川家と旧藩地

- ・ 廃藩置県後、旧知藩事は東京への帰還を命じられる。すでに明治3年11月から大名華族は東京居住を命じられており、知藩事を免職されれば、本人も家族も旧藩地から東京に移住する必要あり
→廃藩直後、知藩事は東京に召集されるが、その家族たちの東京移住は円滑に進んだのか？
- ・ 細川家の場合、護久の妻は廃藩直後に上京するが、母の顕光院や嫂の鳳臺院、そして長男の長岡建千代（後の細川護成）と長女の嘉寿は、廃藩後も熊本に居住。政府には「病気」「虚弱」のための「寄留」と報告
→当該期には、旧鹿児島藩の島津久光をはじめ、少なからぬ旧藩主の家族が旧藩地に継続して居住
⇒細川家の場合、子供たちの旧藩地居住の理由は、①東京よりも熊本での養育・成長を護久が望んだため、

②かつ多くの旧藩士がそれを望んだため

- ・ 上記の護久の家族は、熊本の邸宅（北岡邸、古京邸、砂取邸など）に居住。各邸宅には、細川家に雇用された旧藩士やその関係者が詰め（家扶・家従・女中など）、家族の養育や生活を支える
→熊本の旧藩士は、世子護成がいる北岡邸などに定期的に挨拶に出向く。また、立田邸に置かれた細川家の御祠堂には、年頭、護成や細川家一門のほか、百名以上の旧藩士が参拝【史料6】
⇒廃藩後も旧藩地で大きな存在感を示す細川家。しかし、その存在が旧藩地の混乱を惹起することも
- ・ 明治9年10月24日、敬神党が拳兵し、熊本県や熊本鎮台の幹部を殺傷、熊本城を強襲（神風連の乱）。敬神党の一部は、御曹司の護成を擁立することで、他の旧藩士の協力を取り付けることを企図し、北岡邸に向かう
→北岡邸の日記によると、午前零時前に熊本城の鎮台兵営などから出火し、砲声が響き出したところ、旧藩士の面々が「御守衛」のために参集し、密かに護成たちの避難を勧めた。護成を敬神党の手に渡さないためであり、護成は宇土の桂原に避難。この一件は「いつれ茂苦心仕、紙上ニ難尽候事」【史料7】
- ・ 護成をめぐる上記の騒動を受け、東京の護久は熊本での世子養育を断念し、護成の上京を決断
→廃藩後も旧藩主細川家は、旧藩士に支えられて熊本で大きな存在感をもつが、旧藩主の世子をめぐる混乱が生じたため、世子は熊本から離れることに。旧藩主の家族が本格的な東京移住を果たすまで、廃藩からは一定の期間が必要

おわりに

- ☆ 廃藩置県後、長年培われてきた旧藩主と旧藩士、旧藩主と旧藩地の関係は、簡単には解消されず
- ☆ 熊本藩の場合、廃藩後も旧知藩事の再任を望んだ旧藩士は多く、旧藩主家の歴史資料は旧藩士の手によって守られ、旧藩主の家族の東京移住にも時間を要する
→近世以来の君臣関係を重んじ、旧藩へのアイデンティティを持ち続ける旧藩士の存在。そこには、全国から注目された熊本藩政の治績や明治初年の藩政改革に対する強い自負心が存在
- ☆ こうした明治零年代も維持された旧藩主家と旧藩社会のつながりこそが、その後の両者が協調した各種事業の展開をもたらしたのではないか
→例えば、明治中期の第五高等中学校誘致をめぐる旧熊本藩士の尽力および細川家からの学校建設費の寄付。九州鉄道会社の創立資金調達における細川家の大口投資など
- ☆ 廃藩置県から150年、東京一極集中の歪みは明らか。近世の藩の存在や廃藩がもった歴史的意義について、地域の視点から、地域の史料に即して、改めて考えるべき時期ではないか

参考文献

- ・ 池田勇太『武士の時代はどのようにして終わったのか』（清水書院、2021年）
- ・ 今村直樹「廃藩置県後の細川家当主所用甲冑と旧家臣」（『永青文庫研究』創刊号、2018年）
- ・ 今村直樹「廃藩置県に対する旧熊本藩士の意見書」（『永青文庫研究』3、2020年）
- ・ 今村直樹「細川家歴代当主の甲冑と明治維新」（公益財団法人永青文庫・熊本大学永青文庫研究センター編『永青文庫の古文書』吉川弘文館、2020年）
- ・ 今村直樹「第五高等学校と熊本藩」（『日本教育史往来』244、日本教育史研究会、2020年）
- ・ 内山一幸『明治期の旧藩主家と社会』（吉川弘文館、2015年）
- ・ 勝田政治『廃藩置県』（講談社、2000年）
- ・ 中村尚史『日本鉄道業の形成』（日本経済評論社、1998年）
- ・ 寺尾美保「明治初期における華族意識の形成」（『日本歴史』878、2021年）
- ・ 松尾正人『廃藩置県の研究』（吉川弘文館、2001年）

永青文庫研究センター年報

第13号 (2021年度)

発行日：2022年3月31日

発行者：熊本大学永青文庫研究センター

〒860-8555

熊本市中央区黒髪2-40-1

TEL 096-342-2304

印刷所：シモダ印刷株式会社